

## 9 刈谷市美術館

### 地域小規模館のチャレンジ

#### 1. 美術館の概要

- 開館年: 1983年  
運営母体: 刈谷市  
都市人口: 13万1千人
- 延床面積: 2,347㎡  
展示室面積: 561㎡  
開館時間: 9:00～17:00  
休館日: 月曜、祝日の翌日、年末年始
- 運営スタッフ総数: 5名  
学芸員数: 2名  
教育普及担当者数: 兼務  
(学芸員数、教育普及担当者数は内数)
- 所在地・連絡先:  
〒448-0852 刈谷市住吉町4-5  
tel. 0566-23-1636  
fax. 0566-26-0511  
URL: <http://www.city.kariya.aichi.jp/museum/>

#### 2. 美術館の特色、事業概要

- 刈谷市美術館は、人とひと、人との新たな出会いや交流をもとめ、開館した。美術への親しみと理解をいっそう深め、心の豊かさを育むために美術作品の展示、収集、保存、調査研究をすすめるとともに、展示室を一般の方々に貸出し、創作活動の身近な作品発表の場としての役目も担う。
- 主な収蔵作家: 近・現代の美術作品、刈谷およびその周辺、中部圏と関わりのある作家の作品を中心に収集。浅野弥衛、大沢鉦一郎、中村正義、北川民次、平松礼二など。収蔵作品数は、約340点。
- 常設展: 美術館と併設して市民ギャラリーとしての機能を持ち合わせており、美術館と市民ギャラリー半々で運営しているため、常設展示は行

っていない。企画展を年に約7回、そのうち収蔵品展等を年2回実施している。

- 企画展(1999年度): \*は特別企画展  
色彩と形態のリリズム 島田鮎子展 \*  
衣浦東部美術展  
愛知教育大学美術教室・総合造形コース  
教官展  
刈谷市美術館収蔵品展 - 風景画の世界 -  
まなざし - ラインハルト・サビエ展 \*  
絵本の100年展 - 子どもたちへの贈り物 - \*  
ホイッスラーからウォーホールまで  
- 版画で見るアメリカ美術の100年 - \*
- 年間事業費: 5,935万円  
(人件費、施設管理費を除いた年間予算)  
教育普及経費: 50万円  
(上記年間事業費の内数)
- 総入館者数: 89,010人(1999年度)

#### 3. 教育普及活動導入の背景、経緯

- 刈谷市美術館は、市教育委員会生涯学習部文化振興課が管轄する美術館。開館当初から、市民の発表の場として市民ギャラリーの機能も持ちあわせており、美術館と市民ギャラリーがほぼ半々の日程で運営されている。
- 常設展はなく、企画展を年約7回実施。
- 1990年の市制40周年を機に、美術館としての組織が整備され、企画展開催、作品収集等の活動が徐々に認められはじめた。
- 設立当初の購入予算はゼロ、学芸員もいなかったが、現在は購入予算がつき、寄贈作品も受け入れている。また、学芸員も2名となった。
- 99年度に常設展設置の希望を出したが、市民ギャラリーとの兼ね合いから承認が得られず、常設展はまだ実現していない。
- 92年6月に横浜で開催された「美術館教育普及

\*1: ポケットミュージアムは、美術館の学芸員と学校の美術教員等が組織する、美術館教育に関する研究・実践・情報交換を行うアミューズヴィジョン研究会が制作した美術鑑賞教育のためのツールで、10美術館・76作品のさまざまな大きさの図版や、作家解説、作品解説、鑑賞のヒント等が含まれている。

国際シンポジウム」への参加が教育普及を考える大きなきっかけとなった。

- 翌年の93年の特別企画展「藪内佐斗司の博物学的世界展」から、子どものためのガイドマップの作成とギャラリートークを開始。
- 社会教育施設としての位置づけもあり、子どもを対象とした教育普及活動が中心。市民ギャラリーとして運営され、美術館として機能できない期間も、子どもを対象としたプログラムを継続的に実施していくため、小学校・中学校への出前講座の実施、教育ツールづくりに力を入れている。

#### 4. 教育普及活動の内容と運営

##### ◎ 教育普及活動の構成と内容

- ワークショップ事業：特別企画展と連動したプログラムのほか、夏休みに5歳から小学生を対象にしたプログラムを実施。2000年度は、「線であそぼ!」、「アートでゲーム」等を開催。
- 子ども(小・中学生)を対象としたギャラリートーク：特別企画展の開催時に小学校の低学年と高学年以上に対象者を分けて、ギャラリートークを実施。話のきっかけづくりには、展示作品の部分をカード化したものなど、子どもが興味を持つためのツールも用意している。
- ロビーに、展示作品にちなんだアートカードを置き、同じ作家の絵を捜す、絵の共通点を捜すといったゲーム遊びを用意することで、作品鑑賞のきっかけづくりに結び付けている。
- 当館のような小規模館では、具体的な市民の声を反映しやすいので、リピーター(両親を含む)の中からワークショップ実行委員会といった市民参加、自主運営の基盤づくりができないかと考えている。
- 刈谷市内の15の小学校、6つの中学校の生徒一人ひとりに行き渡るよう、学校を通じてチラシ

を配布している。

##### ◎ 学校教育との連携

- 愛知教育大学の先生を介して、刈谷市内の小学校の美術教師と個人的に話し合う機会が生まれ、学校との連携が始まった。
- 具体的には、
  - 小学校・中学校で鑑賞の授業の実施
  - ポケットミュージアム(\*1)の貸出し
  - ワークシートやアートカード等のツール作成時にアドバイスを受ける

といった形で学校との連携が行われている。

- 鑑賞授業については、学校教育課を通じ、教務主任の先生から美術館に授業への協力依頼がある。こういった点では、美術館が教育委員会の一組織であることがメリットになる。
- 2002年から適用される新学習指導要領にもあるように、「鑑賞」は生涯学習という視点からも大きな課題。
- 美術館は、本物の美術作品があるということが学校との違いであり、オリジナルと向き合うためのきっかけづくりを中心とした連携を心がけている。

##### ◎ 他施設へのアウトリーチ

- 総合病院、図書館、福祉施設、高齢者施設等が美術館に隣接しており、障害者や高齢者が散歩の途中で休憩に立ち寄ったり、病院から来館したりといった潜在的な需要があるので、将来的には連携のしくみをつくりたい。
- 病院や福祉施設で美術館を積極的に利用してもらえるなら、福祉・医療の専門家である職員と話し合っ、具体的ニーズとプログラムを企画できる。
- 美術館の来館者には、企業を退職した男性も多い。刈谷市はトヨタ系列の企業が多いので、工



「アートでたんけん！絵画の世界へ」  
アートカード

場等にアウトリーチすることで、退職前から美術館に興味を持ってもらえるような意識改革ができるかもしれない。

◎ 教育普及活動の実施に伴う効果

- リピーターが多いことは、教育普及活動の効果のひとつ。
- 一人ひとり感性は違っていいんだと子どもたち自身がわかってきたし、美術館側としてはその効果が手にとるように理解できるが、残念ながら数値化できない。何を成果の判断基準とするのか、つまり、効果の主軸をどこに置くのかを美術

5. 教育普及活動の効果、今後の課題と展望

◎ 主な教育普及事業の概要

事業の名称(開始年度)	事業の内容(実績は1999年度)、課題や今後の展望				
絵本の100年展 ワークショップ「絵本をつくろう！」 (1999年度)	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 企画展「絵本の100年展」と連動した、未就学児(小学校低学年も含む)向けの「うずうず、へんしんえほん」と小学生向けの「で絵本」の2つのワークショップ。「うずうず、へんしんえほん」は、絵本に親しむこと、「で絵本」は絵本の特徴やしぐみを知り、さまざまなを使った絵本をつくることで、発想のトレーニングをすることが狙い。</li> <li>• 同じ内容で2回ずつ実施しており、2回目は1回目の反省を活かした進行ができる。</li> <li>• 「うずうず、へんしんえほん」は定番のワークショップとして、図書館や幼稚園等でも実施していきたい。また、本の美術を扱った収蔵作品や企画展を通して、図書館や社会教育センターと連携した活動も検討中。</li> </ul>				
	対象	参加者数	実施頻度	参加料	経費規模
	幼稚園・保育園児 小学生	延べ59名	年4～5回	¥500(未就学児) ¥800(小学生)	20万円 (企画展予算内)
版画に見るアメリカ美術の100年展 ワークショップ「版であそぼう - クリスマス・プリント」 (1999年度)	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 企画展「版画にみるアメリカ美術の100年展」と連動したワークショップ。</li> <li>• 展覧会を鑑賞し、版画の特質、版のしぐみを知るとともに、実際にスチロールと牛乳パックを使って版を楽しむことがねらい。</li> <li>• 今後、定番ワークショップとして小学校でも実施していきたい。また、図書館や社会教育センターと連携した活動も検討中。</li> </ul>				
	対象	参加者数	実施頻度	参加料	経費規模
	小学生	10名	年4～5回	300円	12万円
中学校での鑑賞授業 (1999年度)	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 中学校のクラス単位での、アートゲームや大型図版による鑑賞指導。ゲーム感覚で美術作品に親しみ、作品をじっくり見る姿勢や作品の見方を自然に学んでもらうことが目的。</li> <li>• アウトリーチ活動に力を入れていくためにも、教材づくり、ワークショッププログラムづくりなどを、先生方との協力を得ながら考案していきたい。</li> </ul>				
	対象	参加者数	実施頻度	参加料	経費規模
	中学生	1回33名	年4～5回	-	-

「アートでたんけん！絵画の世界へ」で普及活動の  
ツールとして設置した展示作品の複製  
(マグネット付、パネル状)



館自らが考える時期にきている。

- 評価のものさしを設定するのが、行政なのか、第三者なのかも問題。

#### ◎ 課題と今後の展望

- 美術は作品を作ることだけではなく、見ることと  
感じることをあわせた「鑑賞」も大事な要素であ  
ること、美術館としての公共性と市民ギャラリー  
機能とは別の役割であることを、市の上層部に  
認識してもらおうのが難しい。
- 市民ギャラリーとしての機能も担っているため、  
常設展示が実現していないことも課題。現在、  
企画展開催時に主に普及活動を行っているが、  
企画展を開催していない時期に、いかに継続し  
て美術と美術館の教育普及活動を行っていくか  
が当面の課題。
- 予算的にも、教育普及活動のための単独予算と  
して計上する必要がある。昨年度も予算措置は  
なかったが、引き続き重要性を訴えながら要求  
した結果、平成13年度から、教育普及活動の予  
算が付与された。
- 教育委員会の管轄下にあることで、学校との連  
携面ではメリットもあるが、企画や予算面では、  
市の他の事業と同じプロセスを踏む必要があり、  
美術館としての色が薄まってしまう。
- 情報社会と呼ばれる現在でも、活動のスケジ  
ュールが参加したい人に確実に届いているかは  
疑問。潜在的な参加希望者にも伝わる広報活  
動が必要。また、市民だけではなく、市役所内  
部に向けた普及活動が必要。
- 若くてやる気のある学生を受け入れる土壌がな  
く、普及活動に感心のある若手が美術館に残っ  
ていけない。ノウハウを蓄積し、次世代につなぐ  
ためにも、常に美術館の活動に関わり、プログ  
ラムを展開できる場をつくりたい。
- 将来的には、刈谷市美術館だけの問題ではな  
く、美術界全体の問題として、美術館外の組織

づくりも必要だろう。

- アミューズヴィジョン研究会といった、美術館の  
学芸員と学校の教員との広域の研究会はある  
が、旅費など経費については手弁当にならざる  
を得ず、こうした状況を少しでも改善していく必  
要がある。
- 美術に関わる研修や講習に参加するのは、ほと  
んどが学芸。予算獲得のためにも行政内部での  
理解が重要なので、行政内の事務部門の職員  
にもぜひ出席してもらいたい。
- 教育委員会の一施設として、他の施設が何をし  
ているのかを理解したうえで、美術館は何を特  
徴とすべきかを明確にすることが課題。そのた  
めにも、近隣の他施設とプログラムの共有化や情  
報交換など、協力関係を築く必要がある。今後  
は県内文化施設の横のつながりも大切。
- ワークショップ、学校での普及活動、展覧会活  
動など、現在美術館と「点」で関わっている人  
をつなげていくべき。また、そうした人を美術作  
品やアーティストにつなげていくのも美術館の役  
目。